

日時 平成28年9月15日(木) 9:30～12:30
会場 高知県立高知海洋高等学校
出席者 三谷英子委員、山崎隆委員、東章子委員、時久恵子委員、山崎道生委員、
中村直人委員、西岡美江委員
教育長次長(藤中)、高等学校課長(高岸)、課長補佐(竹崎)、課長補佐(高野)、
定通・産業教育チーフ(山岡)
指導主事(農業・水産担当、工業・情報担当、家庭・看護・福祉担当、商業担当 各1名)
高知海洋高等学校(宮繁学校長、竹中教頭、松本教頭)

配付資料

- 座席図
- 会次第
- 平成28年度 高知県産業教育審議会委員名簿
- 参考資料
 - ・ 第2期高知県教育振興基本計画の概要
 - ・ 産業教育振興法
 - ・ 高知県産業教育審議会条例
 - ・ 高知県産業教育審議会規則
 - ・ 高知県産業教育審議会議事運営規則
 - ・ 平成27年度産業教育審議会概要
- 資料1 平成27年度高知県産業教育関係実績書
- 資料2 平成27年度産業系専門学科及び総合学科等における検定・資格等の取得状況調査
- 資料3 平成27年度公立高等学校卒業者の進路確定状況
- 資料4 平成28年度産業教育関係事業実施状況
- 資料5 産業系高校の取組
- 資料6 高吾地域拠点校に関するリーフレット

1 開会

- (1) 教育委員会挨拶
- (2) 審議委員の紹介
- (3) 事務局の紹介
- (4) 会長・副会長選出
 - ・ 会長に山崎道生委員が推薦され、承認される。
 - ・ 副会長に中村直人委員が推薦され、承認される。

2 資料確認

3 議事

- (1) 第2期高知県教育振興基本計画の概要についての説明(高岸課長)
- (2) 資料1～5について説明(山岡チーフ)

【質疑】

山崎(隆)委員: 取得資格と就職先との関連について調査をしているか。

山岡チーフ: 資格を取得した生徒がどのような進路に進んでいるのかについての調査は現在行っ

ていない。単に資格取得を目標にした授業ではなく、資格取得が進路に繋がるような指導をしていくことを考えている。

山崎（道）委員：資料4で学校外の活動状況について報告があったが、これ以上学校外の活動を増やすことは可能か。これ以上増やすのであれば授業の組み替えになるのか。実際、学校は忙しいと思う。

山岡チーフ：資料4の事業は基本的に授業の中で行っている。民間講師招へい事業については、授業の目標に合ったかたちで進めている。ご指摘があったように、これをさらに増やすには、通常の授業及び実習を行いながらになるので難しいところがある。現在、技術や専門力を高めることを目標にして、どうすべきかを検討しているところである。

山崎（道）委員：1年生で社会に触れ、社会の具体的なイメージを掴むことにより、勉強の動機付けになるのではないか。出来るだけ早い時期に社会を見てもらいたい。

時久委員：資料5では、課題に対して今後の方向性が示されている。平成28年度が始まって6カ月が経とうとしている。動き始めたところがあれば教えてもらいたい。

山岡チーフ：課題では、各教科から教職員の資質向上の面が多くあげられている。実績書でも説明させてもらったが、内地留学、短期現場研修等を積極的に行うなど取り組んでおり、バランス良く研修が行えるようになっている。今後、教科を拡大し、充実した研修ができるように努めていく。

時久委員：今、山田高校の動きが凄い。商業科の生徒が次々と新しいことを開発している。学校長のリーダーシップがあり、教職員の取組に対するバックアップがあり、生徒たちが生き生きと活動している。人数が多くないので小回りが利くこともあり、香美市との連携もよく取れている。「山田まん」や「フラフ」に代表されるように、教員の熱い思いを生徒と共に話し合いながら専門の分野でどンドン切りこんでいくことは素晴らしい取組である。また、普通科の総合的な学習の時間では企業へインターンシップに行き、その体験した内容を基に企業CMづくりをしている。香美市のイベントに合わせてCM上映会がこの週末に計画されている。見えてきた課題に対して、はっきりとした方向性を示してやれば動きが活発になる。先生方の研修は、社会が変わっているのですべて大切にしなければならない。ここに示された課題は、生徒たちと共に解決できるものではないか。周りの地域であったり、大学であったり、企業であったり、外部と連携して、課題に対してすぐに取り組みば活性化してくるのではないかと思う。

山崎（道）委員：山田高校のCMづくりで何回もインタビューされた。生徒たちが苦勞していくことは良いことである。どのような内容を聞いたら良いとかを考えながら、それをまとめていく活動は今日的な作業で良い。商業系での良い流れだと思う。

高岸課長：P7基本計画には学校支援地域本部事業の地域人材のコーディネーターの活用が示されている。山田高校は、コーディネーターと学校が情報を共有しながら地域に出ていく活動の先進的な成功事例である。このような成功事例を参考に地域との連携を強化しなければならない。

中村委員：山田高校の活躍の基盤は、香美市と工科大と山田高校と市教委との連携の組織を3年半ぐらい前に作ったことである。毎月会議を重ねてきてどのように保育園から大学までを繋いで、子どもたちを育てていくかの全体構想を作った中で、高校の活性化をどのようにしていくかを協力してやってきた。教員を個別で支えたりもしている。高知市以外は地域があり、そこに係わる組織が体系化したシステムを作ることにより学校の活性化に繋がっていく。このようなことができていないところをどのように支援していくかについてが、資料5の今後の方向性に出てくれば良いと思う。産業構造別ではなく、地域構造のなかで支援組織を作り、そこに大学などが入り全体の下支えをすることが重要である。農業、工業、商業のそれぞれの学問領域で分かれているのではなく、総合的に支えないといけないところである。

山崎(道)委員：高知市内は描きづらいですね。

中村委員：そうですね。企業の人も入ってきやすい地域で、学校を下支えするシステムを形成することが良い。また、人的な交流が必要である。核となる人の繋がりを支援することが大切である。核となる人的配置を県教委に配慮してもらいたい。

時久委員：市町村の教育委員会は、県の教育委員会や大学と共に子どもたちの教育に係わりたいと思っている。また、商工会の方々や色々な企業の方々が子どもたちと係わりたいと思っており、学校教育と繋がりたいと思っている。また、なんとか活性化したいとの思いをどの地域も持っている。小中学校が、何かを企画して、高校にお願いしたときに「ちょっと忙しい」との返事になるとお願いしづらくなる。小中学校間でも一方が無関心であれば連携は進まない。香美市がうまくいっているのは、高校が何とかしたいとのメッセージを出していることであり、工科大学も高校と繋がりたいとの機運があったことが上手く重なったことではないかと思う。以前から連携協議会での話し合いをしていたが、形にならなかった。香美教育コラボレーション会議で毎月1時間程度自由に教育について語り合いながら、「こんなことができればいいね」と話し合い、それを実行してみたら今の形になった。町の子どもたちをどのように育てたいかや、工科大学ではどのようなレベルの子どもを育てたいのかなどについて時間をかけて話し合った。その中で、みんなと繋がり、学習したことを生かし、行動に移せ、チャレンジできる人、地域づくりを邁進して出来る人をつくろうと支援している。このような取組を3年間やってきたのでイベント的なものではなく、システム的に人材育成ができるものを作っていく時期になっている。新聞で取り上げてもらっているように子どもが動くことにより、町が動いている。産業教育は地域とつながりやすい。地域が求めている課題があるので高校生として出来ることから取り組んでももらいたい。

中村委員：チーム学校ということで産業系の高校とともに事業をおこしたいとの思いがある。その際に、先生方との意見交換する場面が必要であるが、先生方の派遣が難しく、自由に提携ができないことがある。もう少し、先生方の派遣について自由にならないか。このような取組を進めるならもう少し自由度を出してもらわないと支障がでる。

藤中次長：教育委員会はかなり自由度があると思っている。これから役割分担の明確化により整理していく必要がある。非常に多忙な教員が出ていけないこともある。チーム学校として、トータルの中で声を掛けてもらいながら、まわしていきたい。県立高校として、高校3年間で何が出来るかを考え、キャリア教育の視点で、地域の中学校市町村教育委員会との繋がりや、工業会との繋がりを大切にしていきたい。地域との協働連携については、外部人材の活用を含めできることを考えていくので協力をお願いしたい。

山崎(道)委員：「高知家はひとつの家族やき」気軽に連携していきたい。

(3) 高吾地域拠点校の説明 資料6の説明(山岡チーフ)

【質 疑】なし

4 学校視察及び説明(宮繁学校長)

【質 疑】なし

5 その他

・高知工科大学大学院工学研究科高度教育実践コース(中村委員より資料説明)

教育学・心理学をベースに教科内容を研究するコース。長期実習3カ月から1年、現場に行き、授業力向上を念頭に置いている。マネジメント系の授業をとらせ、カリキュラムマネジメントを学ばせて卒業させる。学部卒の学生7割、現職3割で交流を図る。現場職員は1年間は現場を離れてもらい、2年目は土曜のみで修士をとってもらう。優秀な卒業生を高知に残すこ

とと、あわせて現場の先生にも機会を与えていただきたい。

三谷委員：地域の学校は、地域との連携、地域の1つとしてなくてはならない学校として存在している。それぞれが地域に根を下ろしているのは先生方の努力の賜である。

山崎（隆）委員：福祉の就職について、最近の傾向として公務員であっても応募がないという町村が出ている。人との関係性が弱くなっている。高等学校教育の中で心の教育の充実をお願いしたい。支援の必要な学生が増えてきたことで授業がしづらくなる。発達障害が増えてきており、このような状況を見逃すことができない。今後、このような生徒が増えていく可能性もある。支援の必要な生徒への教育の充実を深めていただくようお願いしたい。

東委員：高校のカリキュラムや、先生方の努力を肌で感じている。高校のサポートは充実しているが、中学校に課題があるように実感している。小中の連携はあるが、中高の連携がない。高校が受け皿をもってきているのであれば、中学校3年までの学力を責任をもって上げていく努力を本気でしなければならぬと感じている。

時久委員：中学校からの接続でどういう印象をもっているか。こうあってほしいという課題はあるか。

宮繁学校長：土佐市教育研究所との連携や、教員の取り組んでいる課題研究の一覧表を各小中に配布して講義の内容を伝えたこともあるが、授業時間数の確保等で対応し辛くなっている。高校と小中学校の間に入ってコーディネートする先生がどれだけ上手にやるかが重要である。また、移動の手段としてバスが必要となり、このような行事を行うには予算が必要である。

時久委員：入学してくる生徒たちを見て、中学校の教育に対してもっとこういう教育をしてほしいとか要望はあるか。例えば、基礎学力を高める、生活力が弱いのでたくましく、基本的な生活習慣を身に付ける、チャレンジする力があるなど。ここまでというのはあるか。

学校長：ここ数年、遅刻者が少なくなった。また、補習に残る生徒が多くなった。学力テストの高校1年の1学期がよいということは、中学校の成果でもある。入試制度が変わり、入試日程が遅くなったので、躓ができ、勉強のリズムが継続している感じがあり、勉強する姿勢もよくなっている。学ぶ力を付けていただけたらありがたい。

西岡委員：女性の活躍推進をすすめている。産業系の高校では女子学生が少ないと聞いている。

中村委員：男女比はどんな感じか。

宮繁学校長：生徒数145名（専攻科除く）。うち11名が女子である。以前は女子寮が満杯であり30人以上在籍していた時代もあった。最近の生徒の動向として送り迎えする生徒が増えてきている。学校が遠いという印象があり、女子生徒が敬遠しているのではないかとPRの仕方を考えなければならない。

中村委員：工科大学も同じで、経済マネジメント学群は4割女子学生がいるが、工学は1割。女子が理系に強い職業を選択できるような構造や、もっと身近に就職選択しやすい構造ができるといい。少なくなっているということは、学校の良さがうまく中学校に伝わっていないのではないかと。何か対策を考えなくてはならない。フィンランドやスウェーデンは、工学部や工業高校は男女の生徒数が半々在籍している。職業もほぼ半々である。工業系の資格を有する職業は女子の方が多くなる傾向である。

山崎（道）委員：受け入れる側として、10人が入社試験を受けると上位の半分は全員女子。営業に出す場合は心配する。か弱いという配慮が働きすぎている面もある。今春は開発部に女性を採用している。

閉会